

監修：自治医大ステーション・ブレインクリニック CEO 藤本 健一先生

病気

最近、周りでパーキンソン病の話をよく聞くようになりました。患者さんは増えているのでしょうか。(40代・男性より)

厚生労働省の調査では、2014年次の全国のパーキンソン病の患者さんは、16万3千人となっています。この約10年前の2005年次の調査では14万5千人だったので¹⁾、患者さんは徐々に増えているといえます。

増えている理由はいくつか考えられますが、

- 1 研究の進歩で以前よりも診断がつきやすくなった
- 2 パーキンソン病は加齢とともに発症しやすくなるため²⁾、高齢化社会が進むにつれて患者さんが増えた
- 3 治療が進歩して患者さんの寿命が延びている

などがあげられます³⁾。

【参考資料】

1)厚生労働省大臣官房統計情報部：平成26年患者調査。

<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kanja/10syoubu/>（2020年4月）

2)de Lau LM, et al.: Neurology. 2004;63(7):1240-1244.

3)村田美穂(監修)：スーパー図解パーキンソン病. 法研, 東京, pp18-19, 2014.

病気

パーキンソン病は、ドパミン不足により発症するということですが、なぜドパミン不足になるのですか。年齢や食生活、日々の生活と関係があるのでしょうか。(50代・男性より)

ドパミンは、脳からの指令(信号)を体の各部に伝える物質(神経伝達物質)の一種です。パーキンソン病は、ドパミンが不足することで脳からの信号が伝わりにくくなって、運動の調整などが十分にできなくなる病気です^{1,2)}。

ドパミンは、脳の中の中脳^{ちゅうのう}という部分の黒質^{こくしつ}と呼ばれる組織で作られます。ドパミン不足は、黒質にあるドパミンを作る細胞が何らかの理由で減少することにより、ドパミンが十分に作られなくなることによって起こります。

パーキンソン病には、

① 遺伝要因(体質) ② 環境要因 ③ 加齢

の3つの要因が関係していると考えられています³⁾。

遺伝要因については、パーキンソン病に関連する遺伝子が10個以上見つっていますが、実際には遺伝することは多くありません³⁾。

環境要因については、極端な偏食、ストレス、農薬の影響などを指摘する研究結果がありますが、はっきり証明されたものはありません³⁾。

加齢は発症のリスクといえ、50～70代で発症する人が多くなっています³⁾。

以上のように、今のところ年齢以外には、はっきりした要因はわかっていません。

【参考資料】

- 1) 武田篤(柏原健一ほか編): みんなで学ぶパーキンソン病. 南江堂, 東京, pp2-5, 2013.
- 2) 武田篤(武田篤編): パーキンソン病実践診療マニュアル. 中外医学社, 東京, pp2-3, 2016.
- 3) 柏原健一(監修): パーキンソン病のことがよくわかる本. 講談社, 東京, pp30-31, 2015.

コミュニケーション

脳神経内科を受診していますが、不安な気持ちがあります。セカンドオピニオンを受けてもよいでしょうか？

(60代・女性より)

最近では、医師だけが治療方針を決めるのではなく、患者さんが医師から十分な説明を受けて、患者さんが治療方針に納得したうえで治療を進めることが多くなっています。

そこで、治療方針や病気の説明に不安な気持ちがある場合には、セカンドオピニオンを受ける患者さんもいらっしゃいます。セカンドオピニオンを受けることで、主治医との信頼関係が壊れることはないので、セカンドオピニオンを受けたい旨を主治医にお話しになればよいと思います。

また、脳神経内科(神経内科)の病気は非常に幅広いので、脳神経内科を標榜していても、パーキンソン病以外の病気を主に治療している医療機関もあります。医療機関のホームページなどには、よく治療している病気が明記されていることが多いので、セカンドオピニオンを求める際には、パーキンソン病治療の経験が多い医療機関かどうかを参考にされるとよいでしょう。

